



# エキスパート IVR 症例集

による

## 門脈血栓を合併する出血後十二指腸静脈瘤に対し、同時性バルーン閉塞下塞栓術 (dual-balloon-occluded embolotherapy: DBOE) で静脈瘤塞栓を施行した一例

作原祐介<sup>1)</sup>、櫛引敏寛<sup>2)</sup>、鈴木善法<sup>2)</sup>、藤井亮爾<sup>3)</sup>

1) 国家公務員共済組合連合会 斗南病院 放射線診断科 2) 同 外科 3) 同 消化器内科

### 抄録

十二指腸静脈瘤は比較的稀だが、破裂すると重篤な症状を生じうる。今回我々は、門脈血栓を合併した出血後十二指腸静脈瘤に対し、経回腸静脈アプローチを併用した同時性バルーン閉塞下塞栓術 (DBOE) で静脈瘤塞栓を行い、再出血なく経過している症例を提示する。

**Summary** Duodenal varices are relatively rare but can cause severe symptoms when ruptured. We report a case of posthemorrhagic duodenal varices complicated by portal vein thrombosis, in which the varices were embolized by dual-balloon-occluded embolotherapy (DBOE) with approach via the ileal vein.

### はじめに

食道・胃静脈瘤以外の異所性静脈瘤で、十二指腸静脈瘤の発生頻度は比較的低いが、出血すると時に致死的になりうる。治療法は確立されておらず、本邦では第一選択は内視鏡的治療だが、胃静脈瘤などと同じく大きな静脈瘤では根治が得られず、経カテーテル的治療を要する場合がある。

異所性静脈瘤に対する経カテーテル的塞栓術では、経皮経肝静脈瘤塞栓術 (Percutaneous Transhepatic Obliteration: PTO)<sup>1)</sup>、バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術 (balloon occluded retrograde transvenous obliteration: BRTO)<sup>2)</sup> に加え、流入路・流出路の両方の血流制御が必要な場合は、同時性バルーン閉塞下塞栓術 (dual-balloon-occluded embolotherapy: DBOE)<sup>3)</sup> も選択肢である。

今回は、門脈血栓を合併した出血後の十二指腸静脈瘤に対しDBOEを行い、再出血予防が得られた症例を提示する。

### 症例

患者：60歳代の女性

主訴：黒色便

現病歴：患者は強皮症、シェーグレン症候群、代償期肝硬変（原因不明）、門脈血栓（エドキサバン内服中）で通院加療中だった。黒色便と倦怠感を主訴に当院

消化器内科を紹介受診、採血データで貧血と尿素窒素上昇、造影CTで十二指腸下行脚の静脈瘤と、門脈血栓を認めた（図1）。CTアンギオグラフィーでは、流入路は2本の下臍十二指腸静脈枝で、流出路

は右卵巢静脈に合流していた（図1、2）。上部消化管内視鏡でも十二指腸下行脚に静脈瘤（F<sub>3</sub>RC<sub>0</sub>）を認め、出血源と診断した。大きい静脈瘤で内視鏡的治療は不可と判断、経カテーテル的治療の可否に

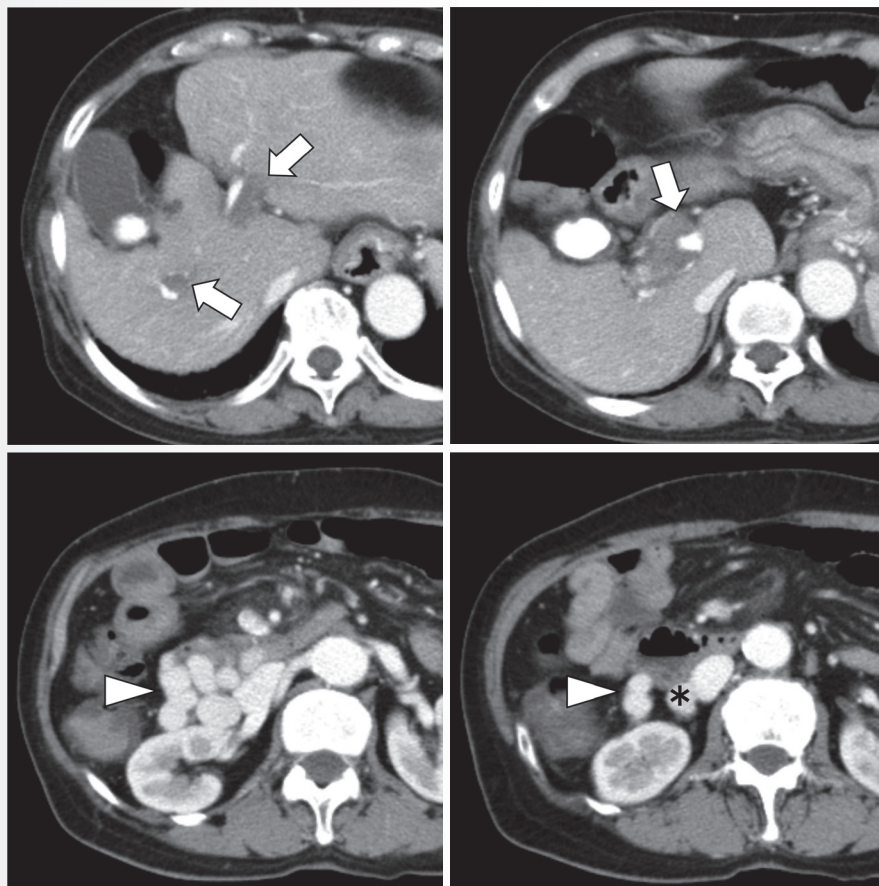


図1 造影CT (DBOE前)

a.b 門脈に血栓を認める (白矢印)。

c.d 十二指腸下行脚に、内腔へ突出する静脈瘤を認める (白矢頭)。流出路は卵巢静脈(\*)。

a b  
c d